地域医療機関さまと亀田総合病院をつなぐ情報誌

かめだより

第76号
2022年4月発行

発行：医療法人鉄蕉会 亀田総合病院/地域医療支援部・地域医療連携室　〒296-8602 千葉県鴨川市東町929　TEL：04-7099-1261（内線7156）
発行責任者:亀田俊明　編集責任者:蔵本浩一

index

P2 … 看護部 認定看護師のご紹介
（シリーズ４：高度臨床専門職センターの紹介）
地域医療連携と「NOBORI」の活用
（シリーズ４：「NOBORI」とスマートホスピタル構想）
P3 … 品質管理部のご紹介
P4 … 地域医療機関さまより
P5 … 当院診療科より
P6 … 小児・AYA世代のがん患者等の妊孕性温存療法
（第２回 当院の取り組みについて）
P7 … スタッフひろば
マイブーム
P8 … トピックス
勉強会情報

高度臨床専門職センターのご紹介

高度臨床専門職センター長 飯塚裕美

1. 高度臨床専門職センターとは

2024年に適用となる時間外労働規制などの医師の働き方改革に向けて「医師から他職種へのタスク・シフティング(業務移管)」を推進していく組織として、2020年10月、高度臨床専門職センター(Advanced Clinical Specialist Center: 略してACSC)が、開設されました。ACSCは、高度な知識と技術を兼ね備えたメンバーで構成されており、各診療科の医療チームにおいてそれぞれの専門性を生かし、患者さまとご家族、また地域の皆さまに、より迅速で質の高い医療を提供することを目的としています。

2. ACSCの組織

ACSCの強みは、メンバーの高度な臨床知識・臨床技能にあります。ACSCのメンバーは、修士課程を修了し、専門知識・技能を持った重症・患者看護専門看護師、がん看護専門看護師、診療看護師、遺伝カウンセラー、高度な実践力を持つ乳がん看護認定看護師、クリティカルケア認定看護師や特定行為看護師、移植患者への支援を専門としたレシピエント移植コーディネーターや造血移植コーディネーターの資格を持つ看護師、より専門性の高い院内資格を持つ周麻酔期看護師やスポーツ医学科のフィジシャンアシスタントとして働く看護師、米国呼吸療法認定を持つ理学療法士、リンパマッサージの認定を持つ理学療法士、周麻酔期チームの臨床工学技士など事務員を含め33名で構成しています。現在、ACSCメンバーが働いている診療科は、院内の18診療科にわたり、診療科のチーム医療の中核をなすメンバーとして、部署を超えて院内を横断的に活動しています。活動の場所も、外来、病棟、ICU、手術室などの病院内だけではなく、在宅など様々で、患者さま、ご家族、地域の皆様へ個々のニーズに対応した安心、安全な医療を提供しています。

ACSCは、全国でも先駆的な活動をする、さらに改革・発展していく組織です。メンバーが働きやすいように、キャリア選択の自由度を高くし、多様な勤務形態を可能とするサポート体制を整えています。また、普段それぞれの診療科で働くACSCのメンバー間がコミュニケーションを取れるようにTeamsなどのツールを活用して、組織内の情報共有を図っています。

3. 今後の展望

ACSCが誕生して1年がたちました。独自の医師のタスクシフト調査では、ACSCメンバーは、48項目を年間52,164時間にわたりタスクシフトしていました。さらに診療科医師や看護師、患者さまより満足度の高い評価をいただきました。

2022年度は、さらにそれぞれの専門性生かした実践・質の向上をスローガンとして掲げ、質の高い実践でチーム医療への貢献を目指していきます。

次回は、高度臨床専門職センターのメンバーの活動についてご紹介いたします。

地域医療連携と「NOBORI」の活用

シリーズ4:「NOBORI」とスマートホスピタル構想

鉄蕉会 情報管理本部 顧問 中後 淳

医療情報共有アプリ「NOBORI」シリーズの連載も今回が最終回です。IT業界ではここ数年「DX:ディーエックス」という言葉がよく使われます。「DX」は「デジタルトランスフォーメーション」の略で、IT技術の活用で今まで行ってきたことが飛躍的に変わることを意味します。すべての産業で「DX」は進んでおり、医療業界でも、例えば、「病院に行かなくても遠隔診療で診察が受けられる」、「AIの眼で放射線画像診断をサポートする」、「院内の薬の配送をロボットに任せる」など、今までとは別次元の改善事例が見受けられるようになりました。そして「NOBORI」はまさに「DX」の一翼を担う重要なアプリケーションになります。

話は変わりますが、8年ほど前に中国北京の大きな医療機関を訪問しました。電子カルテはこれから導入、廊下で点滴をしている人が大勢いて、病院の前には診察順の整理券を売るダフ屋がたくさんいる状態でした。それが2年後には電子カルテはもちろん、周辺システムも導入され病院内の電子化はかなり進んでいました。さらにその

メディカルレポート
品質管理部のご紹介

品質管理部　品質管理課　原　洋子

皆様にはあまり聞きなれない部署だと思います。患者さまと直接かかわる部署ではないため、院内にこのような部署があることも初めて知ったのではないでしょうか。

当院は、「患者中心の医療」を掲げ医療の質の向上に2000年代より取り組んでいます。取り組みの一環として、ISO9001 国際標準化機構：組織の品質管理に関する規格」の認証、及び JCI（Joint Commission International：本部：米国シカゴ・世界中の医療施設の“医療の質の向上と患者安全”を国際基準で評価する第三者機関）の認証を継続して更新しています。それぞれの認証のためには、３年に１回、医療関係の経験を持つ専門の外部審査員の訪問により５日間前後の審査を受けます。昨年は、８月に ISO、12 月に JCI の更新審査を終了し、どちらも認証を継続する事ができました（但し、今回はどちらも新型コロナウイルス感染症拡大により、リモート審査となりました）。

当部署は、それらの認証に関連して、審査の準備、職員への教育・周知、審査の対応、審査結果からの改善を院内で主導している部署となります。

- **審査準備**：審査スケジュール調整、当日審査員対応の割り振り、関連書類の準備等
- **職員教育・周知**：認証を受ける意義、ISO 規格・JCI 基準の教育、内部監査員の教育等
- **審査対応**：審査中の状況確認、審査結果の確認･共有等
- **審査結果からの改善**：審査で指摘された問題について、どのように改善していくかその方法を検討する。さらに対応部門に連絡、改善方法の検討を依頼し結果を確認する。その他、改善のために院内にタスクフォース（小委員会）を立ち上げ院内全体での解決を推進する。

これらの活動継続により、昨年５月に Newsweek が毎年発表するよい病院の世界ランキング「World's Best Hospitals 2021」にて、亀田総合病院が 43 位にランクインしました。

なお同誌の日本の病院ランキングでは、東京大学医学部附属病院（東京都文京区）、聖路加国際病院（東京都中央区）に次ぎ､3 位となりました。この評価基準は、次の３項目で医療機関を評価したものです。１）医療関係者からの推薦　２）患者満足度　３）KPI（重要業績評価指標、日本の場合 DPC データの活用）。今までの地道な努力が報われ今後のモチベーション向上に繋がりました。

医療の質を向上させることが、「患者中心の医療」すなわち患者の安全を守り、ケアの質を高めるための近道と考え、今後も取り組んでいきたいと考えています。

ときから２年後には、医療者側だけでなく予約・受付から会計といった患者さま側まで完全にスマートフォンで完結するのが当たり前になっている光景を目の当たりにしました。日本は得意なはずだった「DX」の分野で、まだまだ差があると思っていた中国にあっという間に追い抜かれ、今では一周遅れと言われたりします。そして医療業界は、制度や言葉の問題などがあり、更に大きな後れを取っているのが実情だと思います。

そのような背景もあり､当院では2019年に「亀田スマートホスピタル構想：スマホ構想」を掲げました。スマホ構想はその名が示す通り、スマートフォンで業務やサービスの提供が可能な医療機関を目指しています。「NOBORI」の活用により、中国で４年前にみた光景にようやく追いつけそうなところまで来ましたが、世界の「DX」のスピードはまだまだ加速しそうです。

ただ、患者さまにとって歓迎されない利便性の追求は当院の目指す医療の姿ではありません。亀田には「患者さまは私たちすべての行動の中心」という大切な行動指針があります。いろいろな病気で受診される、さまざまな世代の患者さま全てが、少しでも快適に医療の提供を受けられるよう、固定観念にとらわれないチャレンジ精神をもって、「DX」を進めるのが亀田の目指すスマートホスピタルです。

アプリダウンロードはこちらの QR コードをご利用ください。

Available on the iPhone App Store　ANDROID APP ON Google play

地域医療機関さまより

あいクリニック

院長 相 正人

当院は2016年９月１日、館山市上真倉で開院しました。開院してまだ５年ちょっとの若い診療所です。それまでは、千葉大学病院や関連病院 安房地域医療センターに勤務して参りました。私は南房総市の出身ですので当院所在地のこの地は幼少時代から知るところでもありました。この地は館山城の城下町として築かれ里見家直接の支配下でもあったため多くの寺院が存在しています。また穀倉地帯でもありました。現在は住宅地として変わりつつあります。

館山は東京湾の入り口に位置し晴れた日には海越しの富士山が裾野まで見えます。夕日百選にも選ばれる富士山の山頂に夕日が落ちていくダイヤモンド富士は圧巻です。また寿司の町、X JAPANの出身地としても有名です。

当院の標榜診療科目は内科、消化器内科、内視鏡内科です。専門の消化器内科では、消化器癌の早期発見を目標に上部、下部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査に力をいれています。住民検診の二次精査医療機関としても上下部消化管内視鏡検査を行っています。また近隣の病院と連携して造影CT、MRI検査の紹介等も行っています。

一方で、成人病や風邪などの一般内科診療や予防接種なども行っています。当院のスタッフは現在６名、患者さんとのコミュニケーションを大切に「適切で良質な、親切、安心、安全、信頼のある医療」を理念として診療を行っています。

高齢化社会や核家族化が進む現代社会ですが、その中にあっても一人一人が元気で暮らせるような医療を目指しています。患者さんとのコミュニケーションの大切さを日々感じています。最後になりましたが、亀田総合病院様には日頃より大変お世話になっており、ありがとうございます。

当院診療科より

血液・腫瘍内科
部長　末永孝生

亀田総合病院の血液・腫瘍内科は1990年に開設し現在まで30数年の歴史があります。開設当初は血液・腫瘍内科を標榜する施設自体が少なく、白血病や悪性リンパ腫の患者さまは東京や千葉の病院で治療を受けられている状況でした。現在、当科は常時約80人前後の患者さまが入院されています。主な治療対象の患者さまは、白血病、リンパ腫、骨髄腫の患者さまでそのほか様々の血液疾患の患者さまが来院、紹介されてこられます。当科の患者数では国内でも虎ノ門病院や倉敷中央などに次ぐ国内でも有数の患者数となっています。このような多数の患者さま背景として私たちは様々の臨床治験や臨床研究にも積極的に取り組んでいます。血液疾患の治療はここ30年で大きく変化してきており、造血幹細胞移植や分子標的治療薬など多様な治療が選択可能となってきています。私たちはこのような治療を積極的に取り入れるとともに、さらにCar-T cell療法やbispecific抗体による治療など最新の治療を試み始めています。

患者さまは鴨川、館山といった安房地区のみならず勝浦、夷隅、君津、木更津、袖ヶ浦、市原からも多くの患者さまが来院されています。また、ここ南房総は高齢化がもっとも顕著な地区であり、ほとんどの患者さまが70歳を越しています。当科の患者さまの平均年齢も高く1/3は80歳以上の方です。高齢の血液悪性腫瘍の患者さまに対する治療は、それを受ける患者さまにとってもまた行う側にとっても困難なことも多く、治療が長期にわたることも多いのですが、できるだけ患者さまの立場に立った治療を行うよう心がけています。

診療については血液疾患であれば外来は**“断らない”**ことを基本としています。血液悪性腫瘍は多くの場合急変も多く、日単位で状態が変化しますのでできるだけ早急に診断をつけて治療を開始することが良い結果につながりますし、また遠くから来られる患者さまを後日に回すことはないようにしています。

疾患別では悪性リンパ腫の患者さまが最も多く年間約150例、急性白血病60～70例前後、骨髄異型性症候群と骨髄腫がそれぞれ30例前後となっています。これらに対して様々の治療が行われていますが、基本的にはNCCNのガイドラインに沿った治療を行うように努めています。同種幹細胞移植は開設当初から行われており現在まで400例以上の患者さまに対して行なってきています。現在、同種造血幹細胞移植（血縁、非血縁、臍帯血）は急性白血病を中心に毎年30例前後、また自家造血幹細胞移植は悪性リンパ腫や、骨髄腫を対象に20例前後に行なっており県内でも最も症例数が多い施設の一つです。また幹細胞移植を受けられる患者さまも高齢の方が多くなり、同種移植は70歳程度まで、自家移植は75歳位までの患者さまが対象となってきています。

患者さまの治療にあたっては、週２回のカンファレンスで入院患者さまの一人一人についてdiscussionをおこない治療方針を決めたり治療効果の評価をおこなっています。さらに移植を受けられる患者さまいついては１回／月に医師、看護師、薬剤師、リハビリ、栄養士などが参加する他職種合同の移植カンファレンスが行われ、医学的な問題点のみならず患者さまの個性や社会的背景も含めた評価をおこない治療の方針や内容について共有するようにしています。また他科との連携も密接に行われており、特に腎臓高血圧内科や放射線科、臨床病理科からはいつもご協力をいただいており感謝しています。

学会発表や論文投稿も積極的に行なっており、今年は寺尾、池田先生がアメリカ血液学会の優秀ポスターにダブルで選ばれました。３年前にもアメリカ血液学会で成田、安部先生が優秀ポスターにダブルで選ばれています。論文投稿では毎年10～20編の英文の論文がBLOODやBJHといった雑誌を含む一流の雑誌にも掲載されておりこの数は国内トップクラスです。さらに亀田の血液・腫瘍内科で研修した多くの若い先生たちが難関の学術振興会の研究員に選ばれ、海外留学をして国内外の研究施設や大学で活躍しているのも自慢の一つです。

私たちは今後とも房総地区の血液患者さまの治療の拠点として、また血液腫瘍を志す若い医師を育てる場として努力してゆきたいと考えています。

小児・AYA世代のがん患者等の妊孕性温存療法

第２回

当院の取り組みについて

臨床心理室
がん・生殖医療専門心理士　宮川智子

2021年４月より、小児・AYA世代のがん患者等の妊孕性温存療法研究促進事業として、妊孕性温存に要する費用の助成事業が開始しました。がん治療開始前に将来の妊娠の可能性を残す医療を、がん・生殖医療または妊孕性温存と言います。前回は助成事業について説明しましたので、今回は当院におけるがん・生殖医療への取り組みについてご紹介します。

がん・生殖医療の特徴

がん・生殖医療の対象患者は、小児・思春期から、成人した未婚・既婚患者と、幅広い年齢層が対象です。またこの世代は就学や就労、結婚や出産・育児といった、様々なライフイベントが起こる時期でもあるため、患者さまによってライフステージも様々です。年齢や婚姻状況によって妊孕性温存の選択肢も異なり、またがん種も様々ですので、患者さまの個別性に沿った支援が必要です。

妊孕性温存はがん治療開始前に行わねばならないため、患者さまはがん告知後まもなくがん・生殖医療について情報提供を受け、時間的制約のある中で、がん治療と同時に将来の妊娠の可能性についても考えなければなりません。患者さまが既婚の場合にはご夫婦、未婚の場合には親御さんや将来のパートナー、それぞれの意見や関係性も決断に影響します。自分一人の問題ではないため、問題はより複雑です。また、妊孕性温存を行っても必ずしも子どもが得られるわけではないことも決断を難しくさせます。このように、がん・生殖医療を考える際には様々な難しさがあり、患者さまは大きな精神的負担を抱えることとなります。

一方で、妊娠の可能性を残すことは将来に希望を持ってがん治療に専念できるというメリットもあります。がん・生殖医療は難しい選択ですが、がん治療後の人生を考える上でとても大切なことです。どのような選択をするにせよ、問題としっかり向き合って自分で決断をすることが大切です。

当院での取り組み

当院ではがん・生殖医療専門心理士２名が在籍しており、急な依頼にも対応できる体制をとっています。院内では医師から直接心理士へ、院外の場合は患者さまから直接病院へ電話がありますが、問い合わせは全て心理士へ繋がるシステムになっています。受診前の調整の段階から心理士がコーディネートを行っており、診察の前にカウンセリングを行います。カウンセリングでは患者さまの理解度を確認しながら丁寧にがん・生殖医療の情報提供を行い、患者さまの気持ちや考え、問題点の整理をして、患者さまがご自身で意思決定できるように支援しています。そして妊孕性温存希望があれば、ARTセンター、亀田IVFクリニック幕張と連携して、患者さまのご希望に沿った医療を提供できるように努めています。

妊孕性温存はその時決断すれば終わりというわけではなく、治療中・治療後もその後の人生の中で長く続く問題です。状況の変化や時間経過によって気持ちも変化しますので、どんなに納得して決断しても、後に迷いが生じることもあります。そのような時にも私たちは支援したいと考えています。妊孕性温存をするかどうかだけでなく、子どもを産み育てることについて、人生の多様性について、共に考えるお手伝いをさせて頂きます。

また、今回の助成事業ではアルキル化剤投与あるいは造血幹細胞移植が実施される非がん疾患も妊孕性温存の助成対象となっています。該当する患者さまがいらっしゃれば、お気軽にがん・生殖医療専門心理士までお問い合わせください。

スタッフひろば

地域医療連携室
メンバーから

今回のご紹介内容
・氏名
①部署 / 職種
②好きな季節と理由
③最近感動したこと

蔵本 浩一
①診療部 疼痛･緩和ケア科 医師
②夏　夏のスポーツが好きだから
③北京オリンピック

大川 薫
①診療部 在宅診療科、地域医療支援部 医師
②夏→秋→冬→春と変わりました、歳とともに
③スワローズ日本一!!

草薙 洋
①診療部
消化器外科 医師
②夏　泳げるから
③沖縄に行ったこと

宮地 康僚
①診療部
腫瘍内科 医師
②春　彩りが豊かで春茜が毎年楽しみなので
③がん患者さんのある一言

渡邉 八重子
①看護管理部
看護師
②秋 年に一度ですが紅葉に癒されています
③患者さまより頂いた「入院生活を快適に過ごせました」という感謝の言葉です

川上 由美
①看護管理部
看護師
②秋　おいしい物が食べられる
③オリンピック

打野 弘子
①総合相談室
看護師
②春　明るくあたたかくなって元気になれる
③菜の花がきれい

吉野 有美子
①総合相談室
看護師
②秋　涼しく景色がきれい
③オリンピック・パラリンピック

安室 修
①薬剤部
薬剤師
②秋　天高く馬肥ゆる秋　高い秋の空と何をするにも快適な秋が好きです
③買い換えた電子レンジの性能

鎌田 喜子
①総合相談室
MSW
②春・秋　さわやか。最近春はくしゃみが出るので秋の勝ち
③庭の梅の枝がこんなにも伸びているのかと思う程上に伸び放題に伸びていたこと

児玉 照光
①総合相談室
MSW
②夏　日が長い、アウトドアが楽しめる
③散歩コースで春を感じた事(つくしやヨモギが出ていた)

大野 知代
①亀田医療大学　教授
(助産師)
②冬～春 ポカポカとした春の陽気は次のステップへの助走だから
③本学の学生が、コロナ禍の貴重な体験をし、国家試験の受験も無事にできたこと

中村 雅代
①地域医療連携室
事務
②秋　好きな洋服が着れるから
③娘が受験に合格したこと

林 裕子
①地域医療連携室事務
②春　日々暖かくなってくるから
③夏と冬のオリンピック

黒川 亜純
①地域医療連携室　事務
②冬　雪の日のツンとした空気が好きです
③種から育てているサボテンがちょっとずつ大きくなっていること

伊藤 博章
①地域医療連携室　事務
②春　冬からの解放感が嬉しいため
③豆カレーの美味しさ

生稲 秋穂
①地域医療連携室　事務
②春　暖かいから
③1歳の甥っ子が、いろいろ喋るようになったこと

大橋 洋子
①地域医療連携室　事務
②秋　過ごしやすい
③数回目のチャレンジでパクチーが大きく育ってきた

亀田総合病院スタッフのマイブーム

「韓国ドラマ…再び」

20 年くらい前の韓流ブーム、昼休みになると同じ部署の女子が「冬のソナタ」について熱く語ってくれた。私は「へぇ、ふぅん…」と話半分で聞いていた。ある日の夜、テレビをザッピングしながら観ていたら冬のソナタが再放送されていた。これがあの冬ソナかと何気なしに観た。そして「落ちた…」。冬の期間に毎夜放送されていたが、何日間か放送が休止になり、ドラマの先がどうにもこうにも気になり過ぎてしまい、初めてレンタルビデオ店に駆け込んだ。が、全て「貸し出し中」で悔し涙を流したことを記憶している。ペ・ヨンジュンとチェ・ジウは美しかった。ペ・ヨンジュンの柔らかく品のある微笑みやクルクル巻きのマフラーが似合うお方にそんじょそこらでお会いしたことがない。だが、ヨン様だけに惹かれたわけではなく、あの何とも切なく、この先二人はどうなってしまうのか、もどかしい程に互いを想う気持ち、心が痛くなるが、でも温かいストーリーに心奪われた。

そして現在。韓国ドラマには沼落ちの危険な過去があるので気を付けていた…、はずであった。コロナ禍でお家時間が増え、Amazon Prime や Netflix など便利な配信サービスの環境を整えた。知り合いの女子が勧める映画やドラマの中から「私の頭の中の消しゴム」を観てしまい、その日から沼に足首まで入れてしまった感がある。何せ次から次へと“あなたにおススメとか興味がありそう”と女子同様に Amazon Prime や Netflix が勧めてくれるので「キム秘書はいったい、なぜ?」を観てしまった。主人公の二人がキレイだし、ラブコメディなので楽しく観ることができた。脇役の男らしいヤン秘書もお気に入りである。

再びの沼に気を付け、愛の不時着に不時着しないよう、楽しみたい。

ポゴシプタ

勉強会・研修会スケジュール

2021年度ご報告及び2022年度スケジュール

2021年度
【第11回　地域連携交流会のご報告】

地域医療連携室　室長　蔵本浩一

この「地域医療連携交流会」は、当院の地域医療連携室が毎年企画・開催してきたものです。安房医療圏やいすみ・山武・長生・君津・木更津などの近隣医療・介護・福祉機関のスタッフを当院にお招きし、講演会とその後の食事会を通して、交流を図るという趣旨で行なっておりました。コロナが始まって以降、2020年と21年は中止としていましたが、今年はWebExの会議システムを用いた初のリモート開催で実施いたしました。

当日は、「当地域でのコロナ対策」をテーマに、3人の演者の先生(鴨川市健康福祉部健康推進課の角田守課長、南房総市立富山国保病院の鈴木孝徳院長、当院臨床心理室の富安哲也室長)のご講演を拝聴しました。座長は在宅診療科の大川薫先生、また今回は特別に感染症科の細川直登先生にコメンテーターとしてお越しいただきました。

３名の演者の先生からはそれぞれ　1)鴨川市のワクチン集団接種の取り組みに関するお話、2)実際に当地域で患者受け入れに携わった医療機関としてのお話、3)コロナ禍で働く職員へのメンタルサポートの取り組みについて、お話をいただきました。３つの演題ともに、パンデミックという非常事態を乗り切るために、それぞれの機関がどのようにして対応してきたのか、現場で働く方々の思いが詰まったお話でした。講演を拝聴して初めて知ったことも多くあり、個人的にも非常に勉強になったと同時に、そのような多くの方々に支えられて今の生活があることを実感しました。

第6波の最中にご登壇頂いた演者や座長、コメンテーターの先生方、ご参加頂いた皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

2022年度
【開催予定勉強会・講演会スケジュール】

1.　がん看護コミュニケーションコース研修

【日時】1日目：2022年6月25日(土)8時～17時
2日目：2022年7月9日(土)8時～17時

【会場】亀田総合病院B棟7階　看護研修室

【対象】がん看護経験年数2年目以上で
がん看護に興味のある看護師
※アンケートに協力できる方に限る

2.　がん看護基礎コース研修

【日時】1日目:2022年11月26日(土)8時～17時
2日目:2022年12月3日(土)8時～17時

【会場】亀田総合病院B当7階看護研修室

【対象】がん看護に興味のある看護師、
もしくは多職種(経験年数1年目でも可)
※アンケートに協力できる方に限る

今回ご案内しております交流会ですが、COVID-19の感染状況により、延期・中止の可能性もございます。ご了承下さいます様お願いいたします。

〈第11回〉地域連携交流会
亀田総合病院 在宅診療科 大川薫先生

鴨川市 健康福祉部健康推進課 角田守課長

南房総市立富山国保病院 鈴木孝徳院長

亀田総合病院 感染症科 細川直登先生